The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世日本物価史の研究
Author(s)	岩橋, 勝
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33728
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	岩橋　勝（いわはし　まさる）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第　6073　号
学位授与の日付	昭和58年4月5日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**近世日本物価史の研究**
論文審査委員	(主査) 教授　原田　敏丸 (副査) 教授　作道洋太郎　教授　竹岡　敬温

論文内容の要旨

近世物価史研究は，物価の動きを通して，前近代の経済の総体的な動きをとらえることを目的としているが，さらに，これまで多数の研究者によって個別に進められてきた各地域・分野における研究成果を総合化し，また理論的に分析され，描かれた経済像を検討するのにきわめて有用な研究方法である。この方面に対する研究の蓄積は断片的で，まだけっして十分とはいえないが、本論文は近世日本において最も重要な位置を占めた米価にスポットをあて，近世経済の構造と変動を分析せんとするものである。

本論文が従来の物価史研究史に新たに付加できる価値は次の3点である。(1)従来の近世物価史研究は18世紀後期以降に関するものが中心であったが，本論文は17世紀初頭まで遡りえた。(2)従来の物価史対象地域はもっぱら大坂に限定されていたが，本論文は江戸はもとより，東北から九州に至る主要地点に拡大した。(3)物価史研究のネックとなっている史料欠落問題に正面から取り組み，一つの研究方法を提示した。

本論文の構成は，従来の物価史研究が，主として史料の欠落という基本問題から進展していないことに鑑みて，「石代値段」を補助的・媒介的データとして利用し得ることの検討と，利用しうる米価データを同質化し，長期連続する時系列に整備することを目的とした第1部，得られた各地方の価格データの背景や，具体的な時系列化の解説を意図した第2部，利用しうる各地米価時系列をふまえて近世経済の構造と変動を物価史の観点から分析し，新しい史実を見出すことを目的とした第3部からなる。

第1部　近世米価時系列作成の方法

「プレ・スタティスティクな時代」といわれる徳川期に長期連続する時系列米価史料を求めることはきわめて困難である。しかし，近世文書の中でもとりわけ残存度の秀れた貢租関係史料の中から，貢

租の貨弊納にあたって換算価格となった石代値段を長期連続して得ることは，さほど困難ではない。第１章は，この石代値段が貢租賦課対象地の米価水準とどのような関係をもって決定されたかを，幕領および私領（但馬出石藩・熊本藩で例証）に分けて検討している。第２章は，市場米価と石代値段の両系列データが連続して同時に得られた。大坂周辺地域と近江の場合について，両者の相関性を検討し，石代値段がたしかに米価史料として利用可能なことを確認している。第３章は各年、各地の米価代表値を，隔地間での比較可能なように決定するための技術的問題を，銘柄間格差，取引制度，枡制および幣制等との関連で検討している。

第２部　各地米価史料とその時系列化

本研究のために，東日本５系列（江戸・名古屋・信州・会津・出羽），西日本９系列（大坂 ── 金・銀建 ──，近江・播州・福知山・広島・防長・佐賀・熊本）の合計14系列長期米価データを利用することができたが，第４，５章はそれらの史料批判と，データの欠けた部分の補整方法を提示している。このため，可能なかぎり，同一地域内の他の米価史料を対比させ，既刊市町村誌類からデータを利用する場合にも厳しい取捨選択を行い，その同質化をはかっている。あわせて各地米流通の動向についても関説した。

第３部　近世米価の地域的構造と経済変動

以上の予備作業を経て本論に相当する。第６章は，地方における価格形成機構と米価変動の特徴を分析したもので，前者については局地内の需給関係で市場米価が成立した近江の場合が先進地型として析出され、後進地型価格形成の一例として佐賀の場合が示される。後者については，都市と農村，内陸と海港に分け考察した。第７章は，すでに整備した14系列の長期的米価データを多面的に分析し，各地のトレンド，水準差，短期的変動などを計測し，あわせて変化率格差の観察により各地米市場の時期別結合度を考察している。第８章は，近世米価の長期的動向から，貨幣改鋳要因や天災等の自然的要因を可能なかぎり除去して，価格史の側面から近世の経済発展の素描を試みている。

第３部から導出される主な論点は次のとおりである。(1)貨幣的要因を除去した米価趨勢は17世紀の70年代まで急速に上昇したあと，幕末までゆるやかに低落する一方であった。これは人口の安定化に伴い，たえず米生産力の上昇が持続したことを示唆する。(2)大坂・江戸を「中央市場」とする通説に対して，米に関する限り，水戸地方から江戸・東海・大坂・瀬戸内に至る，表日本側では，むしろ大坂・江戸の方が低米価であり，従来の米流通機構のあり方についての解釈の再検討が要せられることとなる。(3)時とともに地方，全国を問わず米の価格差は縮少し，その度合は中央一地方都市間よりも，地方市場内での方が激しかった。その要因として海路以上に陸路で輸送手段の改善があったと想定しうる。

論文の審査結果の要旨

本論文は日本近世の物価に関する数量史的研究の方法を確立すると同時に，物価史の側面から近世の経済構造と経済変動の分析を試みたものである。本研究は独自の分析方法を開発して米価史研究に従来

利用されなかった史料を利用して長期的な時系列データの作成に成功するとともに，研究の対象年代を近世初頭まで遡らせ，さらには研究の対象地域を全国的な規模にまで拡大した。これらの点において本研究は日本近世物価史研究上画期的な意義を有するのみならず，日本近世経済史研究の発展に多大の寄与をなすものであって，経済学博士の学位を授与するに十分値するものと判定する。